

平成 27 年度甲府市文化祭参加
八日一山梨演劇塾「YayaYaya」第 15 回公演

紅魔女羅(國)

作・演出 藤谷 清六

あらすじ

(ゆめ、ひさしく、うつくしい)と書いて『夢久美』会、これは町内の無尽会の名称です。

今回は内科医石倉先生の別荘での一泊旅行です。伊豆は伊東の海辺近く、名門川奈カントリークラブまで車で15分です。明日はその川奈CCでゴルフコンペを行う予定です。幹事は町内に住むシニアのレッスンプロです。今宵は別荘でのカラオケ宴会……。

全国津々浦々、どこの町にもある市井の凡庸なる人々のささやかなハレの日です。

とは言え当然のことながら、それぞれのご夫婦には固有の人生模様があるようです。美味しいお酒でほろ酔い気分とは言いながら、人が人を愛するということは？そもそも夫婦の愛とは？考えさせられる一晩となりました。でも明日は楽しいゴルフコンペです。悩みはほどほどに、ゆっくりと、またじたばな夫婦仲良し塾頑張ります！



「純愛幼稚園」— 2回目の思春期は「退行」と「発達」を必要とする

日本人の平均寿命はどんどん長くなっている。「純愛幼稚園」の登場人物たちは40～50歳代のようなので、いわゆる「更年期世代」の男女だが、エンディングでお梅さんたちが語るように、これからは「まだまだ青い」世代になっていくようだ。「人生は黄昏時からの方が楽しい」、には異論はないが、そういうことを呴くこと自体が「青い」感じもある。

男女とも「更年期」は、生物的・生産的役割からの卒業を身体が表してくれている。ご苦労様、よくがんばったね、いつでも神様の元へ戻っていいよ、と「天（このお芝居の中ではキリスト）」はやさしく微笑んでいる。しかし、「脳」の方はちょっと異なる。個人差が大きく、脳のシステムコントロールは自分で決められるし、一生「発達」の可能性もある。こうなると、持ち主は身体と共にエンディングというわけにはいかず、身体と脳の間には解離が生じてくる。

性ホルモンのアンバランスは14歳前後（上り調子の激しさ）と同じく激しいのが更年期（下り調子の激しさ）だが、両方ともホルモンバランスの悪さでは「思春期」と言える。「物思う」年頃が始まる第2の思春期だ。思春期は、そのエネルギーの強さのために「退行」を適度に必要とする。「純愛幼稚園」はそういうところだ。

舞台仕掛けと言葉仕掛けが繰り出す一夜の物語

藤谷清六さんの芝居は毎回観させてもらっているが、楽しみの1つに藤谷さんならではの舞台仕掛けがある。もちろん登場人物の台詞やストーリー展開にも興味津々だが、今回の舞台仕掛けは前代未聞、何と舞台と観客席をアベコベにしてしまったのだ。事前に台本を読ませてもらって知ったのだが、ぶったまげてしまった。観客は舞台の上に並べられた椅子や座布団に座り、観客席だった舞台を見上げ、そこで芝居に目を瞠（みは）り耳を傾けるのだ。新鮮な不思議感、違和感が脳をたっぷりと刺激してくれるだろう。これまでにない桜座の異空間も楽しめるはずだ。芝居では舞台仕掛けに劣らない言葉仕掛けの面白さも期待できそうだ。

医者の別荘で4組の40代から50代の夫婦の宴が繰り広げられる。やがてそれぞれの連れ合いが、互いの連れ合いを替え、男と女特有の言葉が仕掛けられるが、コトが始まったのか未遂なのか、あえて判然としない。3人のひ孫までいるという老人庭師（別荘の使用人）は、「あの連中、まだまだガキだ」などうそぶくが、実はその先を行っている新種の4組の夫婦像なのかもしれないし、人生至福の完熟期にある老人からすれば、やはりまだ若造なのか。何はともあれ、我々観客としても想像力をたくましくして、それぞれの夫婦の深層の中へほろ酔い気分で紛れ込んでみよう。



詩人・エッセイスト
吉屋 夕昭

動と静寂

過去10数回の公演の中で、最も地味な作品だと思います。下手な歌、デタラメな踊り・・・などは確かに陽気な動ですが、その後は静寂です。このコントラストは面白い。勿論、美術・照明・音響も腕の見せ所です。特に役者には心のヒダとウラ・オモテを演じ分ける深い表現が求められます。そして2人の若い女の子と2人の老人も物語を支えてくれるでしょう。今回、私たちにとって最大の楽しみは9人の役者（New Face）たちとの胸は必ずコラボレーションです。どうぞ皆様、ぜひ桜座にお越し下さい。心よりお待ちしております。

プロデューサー 山本 真樹